＝洋書紹介＝

子供の教育

（1969年3月号）

Journal of the Association for Childhood Education

学習における感情の役割をテーマにした本号の巻頭文において、ウォーマット・ビーティは子どもの学習を促し、成熟をはかるために教師が子どもの感情を大切に扱い、その成長の力を信ずることがいかに大切であるかを述べている。

一般に、白紙の状態で生まれてきた子どもが外界からの刺激によって知識や行動の仕方を獲得し、知的なものの基盤を形成することは知られていることであるが、そればかりでなく、子どもはおとなからのたくさんの賞罰や教えを通して自己についての意識を作って行くことも見逃がしてはならない。その自分についての意識の中心が自己概念と呼ばれるものであり、これはことばを使用するようになった子どもが、自分の感情や行動を他人のことばとの関係で眺めるようになって作られる。そして自己概念には自分がどのようであるかの自覚とどうあらねばならないかの自覚とが含まれており、子どものすべての行動はこの二つの差をできるだけ小さくし、適応感を最高にするような方向に向かってなされているともいえるのである。子どもはおとなから教えられた姿に適合するよう努力しているのであるが、もし、周囲からの期待と実際の自己の知覚のずれが大きく、自分が周囲の働きかけに適確に対応できないと思った子どもは不適応感に落ち込んでしまうことになるのである。

他人との関係、作業や学習において、自己表現、あるいは自己決定に関して、受容的、成功的、開放的な経験をすることがいかに子どもをよりよい行動へ導いているかを示す実証的例に待つまでもなく、子どもの行為や感情を一方的、抑圧的に評価する傾向のみられる現状、そのことによって落胆し、疎外されている子どもが増えていないかを反省してみるべきではないだろうか。更にニコラス・ロング等は「子どもの感情的適応をはかるために」の論文で感情的交流の意味と指導の段階について次のように述べている。

自分の考えや経験を他人と分かち、自分を理解し、受け入れてもらっているという感情によって人々は互に歩み寄ることができるのであり、教えることはその開かれたコミュニケーションを行なうことに他ならない。子どもを不安や欲求不満に打ち勝ち、独立的にすることができるのは子どもの世界に入りこみ、共感することのできる教師の能力によるのである。しかしながら、普通の学校では各クラスの10％位の子どもは他の子どもと同じようには活動に熱中できず、他人に理解されない世界に住んでいることに注目しなければならない。この対人関係の欲求不満がやがて情緒障害へ進んで行くのである。こうした子どもたちの指導方法としてワシントンのヒルクレスト子どもセンターで考えられている指導段階が次のように紹介されている。

(1)行動の解釈　はじめは隠された子どもの感情を読みとってやることが大切である。話す内容でなく話し方に注目し、ことばに出すと怒られると思って黙っている子どもの眼や筋肉の動きでその真の感情を理解してやることである。

(2)分類と受容　ことばを用いなくてもコミュニケートする確信がもてるようになれば、次には子どもが身体で感じていることを分類し、意味のある疎通をすることができるようになる。子どものその時々の感情を受容することはむずかしいことだが、子どもがその時にもった感情が当り前のことであることを示してやることによって可能である。例えば「大好きなものをなくした時に悲しくなるのは仕方のないことなのよ」等。

(3)行動の新しい方向づけ　次には感情を適当な仕方で表現する方法をみつけることである。その一つは感情を直接的行動に訴えないでことばで表現するようにしむけることであり、更に、ことばによる表現では十分でない身体や筋肉の緊張を芸術、音楽、スポーツ、劇的表現などの適当な仕方で表わして情緒的な障害を取り除く必要もあろう。また子どもに面接して洞察を得る方法もある。フリック・レドルは効果的に子どもと話し合うために「life space interview」という方法を考え、葛藤状態にある子どもを通して一層子どもを理解し、また改善をはかろうとしており、「まず子どもを受け入れ、構造を与え、そして制限を加える」という原則を用いている。

以上のような手続きや考え方は、普通の子どもの理解においても役立つものであろう。最後に筆者は「宇宙を征服しつつある現在でも、人は内面の世界の豊かさや素晴しい興奮を味うためには何哩も旅を続けなければならないのである。子どもと共感を持つことのできる教師や親、その他のおとなだけが、子どもが未知の対人的世界に安心して旅立つ後立てになることができるのである」と述べているが、混沌とした現代に旅立つ子どもに接するすべてのおとながかみしめたいことばである。

（S）